

<特別セッション>

第一報告：1980年代のマクロ経済の変化にともなう金融学科の必要性

武蔵大学 黒坂佳央

この報告の目的は、金融学科の必要性を設立が検討された1980年代の日本経済を取り巻くマクロ的環境の変化に基づき説明することである。1980年代の日本経済においては、そのマクロ的環境の変化から金融活動の重要性が以下の三つの事柄から生じた。

第一は、金融自由化であった。金融自由化の進展の過程で、様々な金融イノベーションと金融機関相互の競争の激化が発生し、金融システムの効率化が進むとともに、他方では、金融機関の経営格差の拡大に伴って信用秩序をいかに維持するかという問題が生じた。

第二は、金融の国際化であった。日本の金融・証券市場は世界的な規模に達し、日本を中心とする金融取引が急増し、東京はニューヨーク、ロンドンと並ぶ世界の金融センターの地位をめざしていた。さらに、経常収支の大幅で持続的な黒字を達成したことで、日本は世界最大の対外純資産国となっていた。

第三は、日本経済のストック化であった。1989年度の経済白書は日本経済のストック化を分析テーマにとりあげ、保有資産の構成や活用方法の見直し、必要に応じた資産組み替えなどの重要性を指摘した。

上記の三点を主要内容とする、1980年代の日本経済におけるマクロ的環境の変化から生じた金融活動の重要性を体系的に検討するとともに、実社会で必要となる金融知識を身につけるための教育の緊急性から、金融学科の設立が要請されたのである。また、1990年の株価急落とそれに続く地価下落による資産バブルの崩壊も、日本経済のストック化を抜きにしては論じられない現象であり、このような金融活動の重要性に潜む負の側面の解明についても、金融学科の設立は喫緊の課題であった。

さらに、1990年のノーベル経済学賞は「金融経済学」の創始者であるH・マーコビッツ、W・シャープ、M・ミラーの三人に与えられた。「資金配分と価格形成にかかわる金融・証券市場の機能を分析」する金融経済学を用いて、1980年代より重要性を増してきた上記の金融現象を解明することも、金融学科設立の必要性の一つであった。